

ふくしまの子ども達を三重県に招き、お友だちになろう！

島を散策し、クイズに答える

7月30日、朝からまぶしい太陽が照りつける三重県鳥羽市の港・鳥羽マリンターミナルから、コープみえの職員の皆さんとともに鳥羽の離島の一つ・答志島へ向かいました。伊勢神宮の神々にも供えられる鮑などが獲れる豊かな海で遊びながら、「福島の子どもたちと友達になろう」というコープみえの保養企画です。

鳥羽は、古代から素潜りで漁をする海女の国として知られ、近年、人数は減っていますが海女が活躍されています。鳥羽は島が多く、船からは三島由紀夫の小説『潮騒』の舞台となった神島（かみしま）も見えます。

「三重県内に住んでいてもなかなか離島までは行かないので、コープみえの組合員さんたちにとっても楽しい企画だと思います」と浦北さん。

今回のプロジェクトに参加した福島の皆さんは前日に到着しており、海岸での海の幸のバーベキューや魚のつかみどり体験を楽しんだそうです。

コープみえ職員とその家族、取材チームが答志島に着くと、もう子どもたちは港に集まっていて、さっそく今日のゲームであるスタンプラリーの説明が始まりました。

島の子どもたちと福島、三重の子どもたちで7~8人のグループをつくり、島内をめぐってスタンプを押してもらいます。指定された「サンデの底」や「西湖（にしご）の井戸」を探し、「サンデ」の意味や井戸の水質に関するクイズに答えていきます。

クイズの答えは地元の方に聞いてもいいので、通りがかったおばあさんに話しかけて教えていただいたりしていました。ちなみにサンデとは島の言葉でサザエのこと、西湖の井戸の水は海水ではなく真水、でした。強い日差しの下を駆け回る子どもたちは元気そのもの。カメラを向けると、みんなが来てすぐに集合写真になってしまいます。

子どもたちは、「あつー」と言いながら元気そのもの。一人に名前を聞くと、これまたみんなが答えてくれます。「楽しい?」「うん、楽しい!」と返事もそこそこに駆け出していってしまいました。

福島県の郡山から参加した横山祐人

(ゆうと)くん(5年生)は弟の慶人(けいと)くん(2年生)と参加、島では一家に一台はある台車「じんじろ車」を解答用紙に上手に描いていました。

「海は2年ぶり。とっても楽しい」(祐人くん)、「原発事故が起きてから遊べてないから、楽しい」(慶人)とちょっと緊張しながら話してくれました。



三重県と福島県の子どもたちは、
すぐに打ち解けて友達になれた。全員集合の記念撮影。

子どもたちが心からいきいき

大汗をかいてスタンプラリーから戻ると、お昼ごはんです。参加したお母さんたちがみんな70人分のカレーを作り、トッピングには昨日つかみどりしたタコも入っています。島の加工所から蒸したてのシラスの差し入れもいただきました。(今回参加された答志島のお子さんの家からの差し入れでした。)

「いただきます」のあいさつもそこそこに元気よく食べ始め、「タコ、おいしい!」「お替りしてもいい?」「もう海に行きたい!」。子どもたちは少しもじっとしていません。

食後に軽くゲームや写真撮影をしてから、歩いて10分ほどのサンシャイン・ビーチに向かいました。途中、境内に竜の頭のように見えるシイの木がある美多羅志神社(みたらしじんじゃ)におまいりもしました。

海岸に着いたら、準備体操をして海へ。クラゲやヤドカリをつかまえたり、島の旅社の皆さんが用意してくれたライフジャケットを借りてちょっと深いところまで行ったり、おはしゃぎです。

しばらく泳いだ後には、スイカ割りも始まりました。目隠しをして三回まわってからスイカのある方向へ。「もっと右」「違う左」「そのまままっすぐ」まわりの声援にも熱が入ります。

一方、砂浜ではお母さんたちが日陰でのんびり。郡山から参加した仲良しお母さんたちにお話しを伺いました。

鈴木優布音ちゃんのお母さん・貴美子さん「生協の保養プロジェクトはいくつもありましたが、このツアーを選んだ理由は、親子で参加できることです。子どもが小さいこともあり、親子で参加できるものはいいですね」

下田萌音ちゃんと竜生くんのお母さんのさとみさん「子どもたちは、島も初めてなのでカルチャーショックもあるようです。(笑) 私が子どもの頃はゆったりしていたのですが……。また来たいです」。

永崎萌夏ちゃんと達也くんのお母さん・美也さん「普段の買い物では野菜一つ選ぶにも放射能が気になります。ここでは何も気にしないでバーベキューもできて、ありがたいですね」。

皆川朱樹くと聖樹くんのお母さん・仁美さん「子どもたちはイキイキしすぎですよ。昨日はなぜかお風呂場でセミを捕まえてきました(笑)」。



親子で息を合わせて行なうスイカ割りの様子。

親子共に参加できる企画は、とりわけ好評だった。

横山祐人さんと慶人さんのお母さん・由美さん「何も気にしないで子どもたちを遊ばせられるのは嬉しいです。『おうちの中で遊ぼうね』と言うのも可哀想ですが、(将来的な放射能の) リスクを背負うのは子どもたちなので……」。

高野龍成さんのお母さん・聖子さん「子どもたちが外で遊ぶことを含め、当たり前だったことがすべて当たり前でなくなっていました。『公園に行っちゃダメ』というのも辛いです。ここは何も心配いらないのでほっとしますね」。

お母さんたちは、日々の不安を抱えながらも「ここではのんびりできました」と話してくださいました。

倉沢部長は、「皆さんに喜んでいただけたようで、本当によかったです。みえの保養プロジェクトの取組みは二度目になり、一回目は2泊3日でした。『のんびりしたい』との声をいただいて今回は自由時間を増やして3泊4日と長めに設定しました。島の旅社推進協議会さんほか島の皆さんのご協力もいただき、大成功ですね。今後も、福島を中心に被災地とつながっていきます。これまでも保養企画のほか仲間づくり支援や福島に送るカレンダーのデザイン公募などを行ってききましたが、今後もさまざまな支援活動を続けて行きたいと思っています」と話していました。